

牧師所感：マリアン・アンダーソンのように歌いたい

私がもっとも尊敬し慕う、マリアン・アンダーソン女史は、1897年2月27日アメリカ合衆国フィラデルフィアで生れ、1993年4月8日に同国ポートランドで没した黒人の福音歌手である。ところでフリー百科事典“ウィキペディア”によれば、彼女の両親は、サウス・フィラデルフィアのユニオン・バプティスト教会の信徒であった。マリアンは6歳の時に教会の児童合唱に加入する。

アンダーソンはスタントン・グラマー・スクールに通い1912年の夏に卒業した。しかし、彼女の家庭では高校の授業料は貯えず、音楽レッスンに資金を出すこともできなかった。それでもアンダーソンは可能な場合はいつでも歌うことを続けていき、教えてくれようとする人からは誰からでも学んでいった。10代の時期は教会での音楽活動に精を出し続けたが、もはや成人の合唱隊に深く関わっていた。バプティスト若年者ユニオンとキャンプ・ファイバーに加盟するが、得られる音楽活動の機会は限られたものだった。最終的にはピープルズ・コーラスと教会の牧師であるレヴェレンド・ウェズリー・パークス、そして黒人コミュニティの長たちが必要な資金を用立てし、彼女はメアリー・ソーンダーズ・パターソンに歌の指導を受けるとともにサウス・フィラデルフィア高校にも通えるようになり、同校を1921年に卒業した。

1925年にニューヨーク・フィルハーモニックの後援で開催された歌唱コンテストで1等賞を獲得し、アンダーソンに最初の大きな転機が訪れた。優勝者として掴んだ1925年8月26日の同オーケストラとの共演によるコンサートは、たちまち聴衆と評論家の双方からの賛辞で迎えられることになる。アンダーソンはニューヨークに留まり、フランク・ラ・フォージの下で更なる研鑽を積んだ。この頃、ニューヨーク・フィルハーモニックを通じて面識を得たアーサー・ジャドソンが彼女のマネージャーに就いている。これ以降の数年間にアメリカ国内で多数のコンサートに出演するも、人種に関する偏見によりキャリアに大きな弾みをつけるには至らなかった。1928年には初めてカーネギー・ホールの舞台に立っている。ついにヨーロッパに赴くことを決意したアンダーソンはサラ・カイエについて何か月も特訓を行い、その後ヨーロッパツアーやを成功させることとなる。

ヨーロッパでの名声

1933年、ロンドンのウェイモア・ホールでヨーロッパデビューを飾ったアンダーソンは熱狂を巻き起こした。1930年代のはじめは演奏旅行でヨーロッパ中を巡ったが、ここではアメリカで経験したような人種差別に出会うことはなかった。

以上で見るよう、彼女が名聲を得るまでは、幾度にも差別を受けた。記録によれば、アンダーソンは、“白人専門の音楽学校であったフィラデルフィア音楽アカデミー（現フィラデルフィア藝術大学）に応募したアンダーソンは、肌の色を理由に門前払いを受けたと”と。彼女が応募しようとした際に、窓口の女性は「有色人種は受け入れていない」と応じたという。だが神は彼女の才能を生かし、彼女をして“御自分の栄光を現わす道具としてお使いなさったのである。”

しかるにアンダーソン女史が1935年、ヨーロッパのザルツブルクへのツアーでは、指揮者のアルトゥーロ・トスカニーニが、彼女の声は『100年に一度しか聴くことのできない』ような声であると本人に伝えている。

ところでこのような名聲を聴くアンダーソン女史であったが、人間の讃辞より、神の栄光を褒め称える事が歌う目的であったことに、尊敬する理由がある。

さて筆者は来る7月23日24日に“日本伝道の幻を語る会”で讃美を歌うことに決っているが、甚だ恐れ多い。特にコロナ禍以後、対面集会を開催するのは初めてで、全能の神に栄光が帰せられるように、と祈る。